

昨年3月11日に発生した東日本大震災から1年を迎えようとしている今、「災害に備える」「地震・津波が来た時の行動」など町内の学校や各町内会単位で、町の防災担当の話をお聞き改めて考える機会が増えています。



先日北檜山中学校1年生が「防災について考えてみよう」というテーマで町の防災担当者を講師として公開授業が行われました。

授業が始まって間もなく、町の防災担当者が「地震・津波が来たらどうする？」との質問に「すぐ逃げる」と手を挙げて答えた生徒はほんのわずか。あとは「様子を見る」や「危険だと思うけどすぐには逃げない」など、東日本大震災後、全国でアンケート調査を行った結果とほぼ同じ状況でした。

せたな町も平成5年に発生した北海道南西沖地震では、津波による甚大な被害がありました。今回授業を受けた中学1年生はまだ生まれていなかったため、実際の大地震や津波の経験がありません。

昨年の東日本大震災においてもテレビや新聞で毎日のように悲惨な光景が映し出されてはいるものの、実感があまりわかなかつたかもしれません。

生徒たちは、町の防災担当者の「防災・災害」に関する講話を聞いた後、グループに分かれ「災害に備えた街づくり」をテーマに話し合い、「高い堤防を作る」「川を別の方向に流す」「避難訓練を増やす」など様々な意見の発表がありました。

最後に生徒一人ひとりが感想を用紙に書いて授業は終了。45分の短い時間でしたがどんな感想を抱いたか、何人か見せてもらいました。「昔地震があったことが分かった。自分も気を付けなければと思った」「命にかかわる話だった。避難することは大事」などと書かれており、ある生徒が書いた「すぐに逃げることを決心した!!」の言葉に、防災担当者から笑顔がこぼれ、いつか誰かに「地震・津波が来たら？」という質問されたとき、この生徒たちが「すぐ逃げる!」とみんなが手を挙げてくれることを願っていました。

「自分の生命は自分で守る」。日頃の生活でもちょっとした意識をすることで、「災いを防げる」ことがあると思います。東日本大震災は他人事ではありません。いつ何が起こるかわからない時代だからこそ、みなさんも災害に備えることを改めて考える時間を作ってみてはいかがでしょうか。

